

日本カトリック映画賞 40 年の歩み



SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）

カトリック映画賞とは

晴佐久 昌英
(SIGNIS JAPAN 顧問司祭 / 東京教区司祭)



日本カトリック映画賞は、私たち SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）が、年に一度、キリスト教の愛の教えに基づく福音的な映画を選び、その監督に贈る賞です。

キリスト教の愛の教えとは、すべての人は神に愛されている神の子であり、イエスが人々を愛したように互いに愛し合えというものです。

イエス・キリストは、中でも特に貧しい人、抑圧された人、排除された人、病気の人、障害を持つ人、罪人など、社会的に弱い立場にある人たちを家族のように受け入れ、すべての人をわが子として愛する神の親心を告げ知らせ、実際に自らの命までも捧げる十字架の死によって、神の愛を証しました。

これまでの授賞作品はいずれも、弱く小さな一人ひとりの人間を大切にする、人間愛をテーマとするものです。それらはイエスにおいて現れた神の愛に通ずるものであり、私たちはそのような作品を「福音的映画」と呼んで高く評価してきました。

映画は、人種や言語、宗教を越えて、多様な人々を共感によって結ぶ、真に普遍的なメディアです。排他的な原理主義と、無知による暴力が広がる現代社会にあって、私たち SIGNIS JAPAN は、映画によって互いに理解し合い、映画によって愛と平和の文明を造りだすことができると信じています。

福音的映画を選び、賞を差し上げて応援することで、キリストの普遍的な愛の教えを広め、人々の幸いに少しでも貢献したいというのが私たちの願いです。

(「タリタ・クム！」22号 2015年12月24日発行)

日本カトリック映画賞 40 年の歩み

千葉 茂樹
(SIGNIS JAPAN 会長)



『あなたがたは、二つの組織を統合して新しく、すべての視聴覚メディアのための国際カトリック組織 SIGNIS を創立しようとしておられます』

2001 年バチカンでの OCIC、UNDA 世界合同大会によせて、ヨハネ・パウロ 2 世教皇が、世界中の広報担当者（300 余名）を招いて、新しい時代にふさわしい呼びかけ・メッセージを発したのが始まりでした。私は、日本を代表してその会議に参加していて感動と胸が痛むような思いでした。何故なら教皇自身がご老体で腰が曲がり周囲から抱えられながらのメッセージだったからです。晩年の教皇はバチカン広場で暴漢に狙撃されて以来、不自由な体調で激務をこなしてこられたのです。

思い起こすと 1981 年 2 月、歴史上初めての来日をした時、わたしはヨハネ・パウロ 2 世教皇が滞在の 4 日間を記録映画「平和の巡礼者」（女子パウロ会）として製作しましたが、そのときのすばらしい勇姿と日本語のスピーチは見る影もなく悲しい姿だったのです。

『全ての人にキリストを知らせ、愛してもらうという教会の使命は、かつてない新たな機会を得ると共に、またかつてない挑戦にも直面しています。SIGNIS が、私たちの世界に主がいつまでもいて下さることと、全ての人への主イエスの変わらない愛を伝える、かつてない有効な道具となりますように』（2001 年世界大会に寄せて——ヨハネ・パウロ 2 世スピーチ抜粋）

SIGNIS 以前の日本カトリック映画視聴覚メディア協議会（OCIC）は、1976 年に第 1 回優秀賞「土呂久」を始め、時代にふさわしい作品に対して、毎年優秀賞を授与してきたのです。その表彰式は、四ッ谷にあった中央協議会の会議室で、関係者 30 人程をお招きしてささやかな祝宴を続けて来ました。メンバーも、メディアのプロが 10 人足らずでした。

第 21 回「絵の中のぼくの村」に出会った私たちは、初めて神田の教育会館を借りて上映会と映画監督の講演を実施しました。いつも主イエスの導き、教皇と司教団の協力によって働いてきました。そして 2007 年に大きな変革の機会が与えられたのです。長いこと、日本での開催は難しいと思われていた東京での SIGNIS アジア会議を皆の力で開催することができました。SIGNIS JAPAN になって新たなメンバーが加わったお陰です。その機会に受賞作「博士の愛した数式」も、国立オリンピック記念青少年総合センターで上映されました。しかし、第 33 回の受賞作「おくりびと」は「日本カトリック映画賞」を贈りながら、配給会社の都合で中止になってしまいました。

私たちはメディアによる宣教を 41 回、そして 50 回へとこれからも続けていきます。

未来に向かって、社会が抱える困難に勇気を持って働く覚悟も必要です。一人ひとりのいのちを守り、平和な世界をつくり出すために働くことが SIGNIS の大事な役割と思うからです。

心からの感謝のうちに。

第1回 1976年 咽び唄の里 土呂久 (Toroku)



監督：伊藤宏一 Ito Kouichi

製作：工藤正彦／撮影：佐々木彦人／音楽：久石譲／編集：伊藤宏一、山本きよみ／スクリプター：福島音響、谷口彰、芥川仁

ナレーション：寺田農

助監督：石倉保志、岸博明

製作年：1976年／製作国：日本／上映時間：90分

第2回 1977年 ねむの木の花がきこえる (Mariko-Mother)



監督・脚本・製作・音楽：宮城まり子 Miyagi Mariko

撮影：岡崎宏三

キャスト：宮城まり子、平田安彦、高沢俊光、根岸安子

製作年：1977年／製作国：日本／配給：エキブ・ド・シネマ＝東宝東和／上映時間：95分

第3回 1978年 春男の翔んだ空



監督・脚本：山田典吾 Yamada Tengu

製作：山田火砂子、山田典吾／／撮影：小林節雄／音楽：いずみたく／美術：木村威夫／録音：飛田喜美雄／スクリプター：丸山裕司／照明：佐藤勝彦

ナレーション：矢野宣

キャスト：永六輔、佐藤オリエ、愛川欽也、原知佐子、山口崇、太宰久雄、渡辺文雄、三崎千恵子ほか

製作国：日本／製作年：1977

第4回 1979年

マザー・テレサとその世界 (Mother Teresa and her world)



監督・脚本：千葉茂樹 Chiba Shigeki

企画・製作：小島好美、白井詔子／撮影：河内豊英、伊藤嘉宏／音楽：山崎宏／録音：新坂スタジオ／編集：近代編集室／スチル：白井詔子／協力：アリタリア航空会社、カリタス・ジャパン
ナレーション：来宮良子

賞状文

近代映画協会製作ドキュメンタリー映画「マザー・テレサとその世界」は 見る人に深い人間愛を与えてくれました
経済上 取材上の多くの困難を克服してマザー・テレサの映像化に取り組まれたことは 大きな賞賛に値します
ここにささやかな OCIC JAPAN トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 ホセ・デ・ベラ

第5回 1980年

父よ、母よ！ (Chichi yo, Haha yo)



監督・脚本：木下恵介 Kinoshita Keisuke

製作：沢村国男／製作補：斉藤森恒／原作：斎藤茂男／撮影：小杉正雄／照明：佐久間丈彦／音楽：木下忠司／録音：島田満／美術：重田重盛／編集：杉原よ志
キャスト：加藤剛、田村高廣、岩崎加根子、三原順子、夏江麻岐、石田純一
製作国：日本／製作年：1980／配給：松竹

賞状文

貴方が監督された松竹映画「父よ、母よ！」は 見る人に深い感銘を与えてくれました
高度経済成長に心を奪われた現代日本にあって その社会の歪みともいふべき少年非行の問題を鋭く追求し人生でも最も大切な“愛”の美しさと尊さを強く訴えられたことは 大きな賞賛に値します
ここに OCIC JAPAN トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 ホセ・デ・ベラ

第6回 1981年

巣立ちのとき 教育は死なず (Things that Teacher's Can Do)



監督：板谷紀之 Itaya Noriyuki

脚本：板谷紀之、山形雄作、今崎暁巳／原作：若林繁太／企画：山口逸郎、石井修吾／製作：山口逸郎、石井修吾／プロデューサー：相澤徹／撮影：杉田安久利／美術：坂口武玄／装飾：本田清／音楽：岡田和夫／録音：矢野勝久／照明：中谷敏清／編集：中静達治／製作主任：光永憲之
キャスト：長門裕之、江利チエミ、陶隆司、新田昌玄
製作国：日本／製作年：1981／配給：共同映画全国系列会議

賞状文

貴方が監督された翼プロダクション製作の映画「教育は死なず」は 私たちに深い感銘を与えてくれました
教育の荒廃が叫ばれる今日 貴方がこの作品によって真の教育のあり方を社会に強く訴えかけられたことは大きな賞賛に値します
ここに OCIC JAPAN トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 ホセ・デ・ベラ

第7回 1982年 該当作品なし

第8回 1983年

この子を残して (Children of Nagasaki)



監督：木下恵介 Kinoshita Keisuke

脚本：山田太一、木下恵介／原作：永井隆／製作：笹井英男、東條あきら、金沢博、斎藤守恒／撮影：岡崎宏三／美術：芳野尹孝／音楽：木下忠司／録音：島田満／照明：佐久間丈彦／編集：杉原よ志
キャスト：加藤剛、十朱幸代、中林正智、西嶋真未
製作国：日本／製作年：1983／配給：松竹

賞状文

貴方が監督された松竹・ホリ企画提携作品「この子を残して」は 見る人に深い感銘を与えてくれました
世界平和の危機がひしひしと身に感じられる今日 核戦争の悲惨さと罪深さ 同時に永井隆氏の家庭を通して「愛」の美しさと尊さを強く訴えられたこの映画は あなたの世界平和への切実な願いを十分に人々に伝えるものであり 全世界への警告として大きな賞賛に値します
ここに OCIC JAPAN トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 ホセ・デ・ペラ

第9回 1984年

国東物語 (Kunisaki Monogatari)



監督：村野鐵太郎 Murano Tetsutaro

製作：村野鐵太郎、長野健／プロデューサー：林秀樹／原作・脚本：高山由紀子／企画：長野厚／撮影：吉岡康弘、高間賢治／音楽：南こうせつ／美術：本郷淳、松本義治／編集：日吉裕治／録音：日吉裕治／スクリプター：石松健男／照明：大石弘一
キャスト：隆大介、貞永敏、峰岸徹、滝田裕介、井川比佐志、藤真利子、岡本舞、横内正 ほか
製作国：日本／製作年：1985／配給：エキブ・ド・シネマ

賞状文

貴方が監督された大分合同新聞社・鐵プロダクション製作の映画「国東物語」は 私たちに深い感銘を与えてくださいました 戦国時代のわが国に初めてカトリックの教えが渡来した当時の記念すべき歴史のひとこまを美しい映像によって見事に活写されたことは大きな賞賛に値します
ここに OCIC JAPAN トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 白井 詔子

第10回 1985年 最優秀賞

銀河鉄道の夜 (Night on the Galactic Railroad)



監督：杉井ギサブロー Sugii Gisaburo

脚本：別役実／原作：宮澤賢治／原案：ますむらひろし／企画：伊藤正昭、山下健一郎／プロデューサー：原正人、田代敦巳／映像：前田庸生／美術：馬郡美保子／音楽：細野晴臣／作画：江口摩吏介／製作プロダクション：グループ・タック、ヘラルド・エース
キャスト：田中真弓、坂本千夏、中原香織、金田龍之介
製作国：日本／製作年：1985／上映時間：107分／製作会社：朝日新聞社＝テレビ朝日＝日本ヘラルド映画グループ／配給：日本ヘラルド

賞状文

貴方が監督された日本ヘラルド映画・テレビ朝日・朝日新聞社共同製作の映画「銀河鉄道の夜」は 私たちに深い感銘を与えてくださいました
経済的成長にのみ心を奪われた現代日本にあって 人心の荒廃ことに陰湿ないじめなど青少年の問題が大きく取り上げられている今日友情と愛の美しさと尊さを すばらしい映像によって描かれたことは大きな賞賛に値します
ここに OCIC JAPAN トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 白井 詔子

第10回 1985年 優秀賞

こんにちは地球家族 (Hallo! One World One Family)



監督・脚本：千葉茂樹 Chiba Shigeki

企画：小島好美／撮影：伊藤嘉宏、川内豊英／音楽監督：山崎宏／主題曲：石田桃子／編曲：小六禮次郎／歌：しゅうさえこ／製作：市民グループ地球家族の会／協力：近代映画協会、女子パウロ会

ナレーター：榎山文枝

製作国：日本／公開：1985

賞状文

貴方が監督された近代映画協会製作の映画「こんにちは地球家族」は 私たちに深い感銘を与えてくださいました

マザーテレサの精神 すなわち人生において最も大切なキリストの愛を実践している素晴らしい人々を映像によって紹介されたことは大きな賞賛に値します

ここに私たちの感謝と共に表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会

会長 白井 詔子

第11回 1986年

海と毒薬 (The Sea and Poison)



監督・脚本：熊井啓 Kumai Kei

原作：遠藤周作／製作：滝島恵一郎／プロデューサー：大塚和、宮川孝至／撮影：梶沢正夫／美術：木村威夫／音楽：松村禎三／録音：久保田幸雄／照明：岩木保夫／編集：井上治

キャスト：奥田瑛二、渡辺謙、成田三樹夫、西田健

製作国：日本／製作年：1986／配給：日本ヘラルド

賞状文

貴方が監督された映画「海と毒薬」は 私たちに大きな感銘を与えてくださいました

高度経済成長に心を奪われ各方面で人間性の喪失が叫ばれる今日の日本において 人間の良心の問題を素晴らしい映像によって強く呼びかけられたことは大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会

会長 白井 詔子

第12回 1987年

ゴンドラ (Gondola)



監督：伊藤智生 Itou Chishou

脚本・原案：伊藤智生、梶野子／プロデューサー：貞末麻哉子／撮影：瓜生敏彦／美術装置：張ヶ谷実／美術小道具：村上孝夫／音楽：吉田智／録音：大塚晴寿／照明：渡辺生／編集：掛須秀一

キャスト：上村佳子、界健太、木内みどり、佐々木すみ江

製作国：日本／製作年：1987／上映時間：112分／製作会社：OM プロダクション



受賞式での伊藤智生監督

第13回 1988年

火垂るの墓 (Tombstone for Fireflies)



監督／脚本：高畑勲 Takahata Isao

原作：野坂昭如／企画：佐藤亮一／製作：佐藤亮一／プロデューサー：原徹／制作：スタジオジブリ
／レイアウト：百瀬義行／キャラクターデザイン・作画監督：近藤喜文／撮影監督：小山信夫／美術監督：山本二三／音楽：間宮芳生
／音響監督・音響演出：浦上靖夫／整音：大城久典／音響効果：大平紀義、伊藤道広／編集：瀬山武司／制作デスク：押切直之／制作担当：上田真一郎／キャラクター色彩設計：保田道世／宣伝プロデューサー：徳山雅也

キャスト：辰巳努、白石綾乃、志乃原良子、山口朱美

製作国：日本／製作年：1988／上映時間：88分／製作会社：新潮社／配給：東宝



受賞式での高畑勲監督

第14回 1989年 最優秀賞

黒い雨 (Black Rain)



監督：今村昌平 Imamura Shohei

脚本：石堂淑朗、今村昌平／原作：井伏鱒二／プロデューサー：飯野久／撮影：川又昂／美術：稲垣尚夫
／音楽：武満徹／録音：紅谷愼一／照明：岩木保夫／編集：岡安肇

キャスト：田中好子、北村和夫、市原悦子、原ひさ子

製作国：日本／製作年：1989／上映時間：2時間3分／製作会社：今村プロダクション＝林原グループ／配給：東映

賞状文

あなたが監督された映画「黒い雨」は 私たちに大きな感銘を与えてくださいました
戦後空前の物質文明の繁栄に魂を奪われがちな今日の日本において愛すべき市井の一家族の体験を通して戦争の悲惨さ ことに人類が忘れてはならない原爆の恐ろしさを鮮烈な映像によって強く訴えられたことは大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします。

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 白井 詔子

第14回 1989年 優秀賞

戦場の女たち (Senjo no onnatachi)



監督：関口典子 Sekiguchi Noriko

製作：関口典子、山上徹二郎、クリス・オーエン／撮影：クリス・オーエン、清水良雄／音楽：小室等

製作国：日本／製作年：1989／上映時間：55分／製作会社：シグロ SIGLO

賞状文

貴女が監督された映画「戦場の女たち」は 私達を大いに啓発して下さいました
高度経済成長に心を奪われ各方面で人間性の喪失が叫ばれる今日の日本において 人間の良心の問題をすばらしい映像によって強く呼びかけられたことは大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 白井 詔子

第15回 1990年

ベンポスタ・子ども共和国 (Bemposta kodomo kyowakoku)



監督：青池憲司 Aoiike Kenji

監修：ヘスス・シルバ、村田栄一／制作：前田勝弘、福田信、松井寛子／撮影：恒松龍兵／音楽：箕輪単志
／主題歌：ハウンドドッグ（「Your Song」）

ナレーション：草野大悟

製作国：日本／製作年：1990／上映時間：99分／製作会社：幻燈社＝マザー＆チルドレン／配給：幻燈社

賞状文

あなたが監督された幻燈社・マザー＆チルドレン製作の映画「ベンポスタ子ども共和国」は 私達に大きな感銘を与えてくださいました

キリストの教えに立脚したヘスス・シルバ神父が こどもたちと共に現実のものとして築きあげた“愛”の「共和国」を素晴らしい映像によって強く訴えられたことは 物質文明にのみ心を奪われがちな現代の日本にとりまことに意義深く大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会

会長 白井 詔子

第16回 1991年

あーす (Earth)



監督・脚本：金 秀吉 Kim Sugiru

原作：西田好子／プロデューサー：貞末麻哉子、高橋 聡・益田邦一／撮影：金 徳哲／照明：岩崎 豊 / 録音：松本隆司／編集：松村将弘／音楽：山本純ノ助

キャスト：朝比奈潔子、新屋英子、山村弘三、芦屋小雁 ほか

製作国：日本／上映時間：82分／製作年：1990年／製作：あーす製作委員会作品

賞状文

あなたが監督なされた映画「あーす」は 私たちに大きな感銘を与えてくださいました

物質文明にのみ心を奪われがちな現代の日本において地球にとってゴミをめぐる環境問題の重大さそしてゴミの中にあってもゴミ収集に興味をもった少年とゴミ収集作業員の青年とに通い合う友情の美しさをすばらしい映像によって強く世に訴えられたことは まことに意義深く大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会

会長 白井 詔子

第17回 1992年

阿賀に生きる (Living on the River Agano)



監督：佐藤真 Sato Makoto

撮影：小林茂／音楽：経麻朗／録音：鈴木彰二

製作国：日本／製作年：1992／上映時間：115分／製作会社：阿賀に生きる製作委員会／配給：阿賀に生きる東京上映委員会（配給協力：シネセゾン）

賞状文

あなたが監督された映画「阿賀に生きる」は 私たちに大きな感銘を与えてくださいました

物質文明にのみ心を奪われがちな現代の日本において阿賀川とその川沿いに住む人々をすばらしい映像によって描きながら単なるドキュメントに終ることなく 映画の本質と人間の本質について独自の方法で迫り 多くの問題を強く世に訴えられたことは まことに意義深く大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会

会長 白井 詔子

第18回 1993年 スペインからの手紙



ベンボスタの子どもたち (Spain kara no tegami)

監督：朝間義隆 Asama Yoshitaka

脚本：朝間義隆／製作：櫻井洋三／プロデューサー：田沢連二／撮影：花田三史／美術：芳野尹孝／音楽：堀井勝美／歌：中西保

キャスト：緒形直人、源啓介、原田知世、藤田まこと、佐久間良子

製作国：日本／製作年：1993／上映時間：110分／製作会社：松竹＝トーハン作品／配給：松竹

賞状文

あなたが監督なさった映画「スペインからの手紙」は 私たちに大きな感銘を与えてくださいました
美しいスペインに実在する「ベンボスタ子ども共和国」に入国した日本の少年を主人公に共和国の人々との友情 日本の兄との兄弟愛を描きつつ そこで文字通り実践している「強い者は下に 弱い者は上に」という人間として最も大切な心構えを すばらしい映像によって強く訴えられたことは物質文明にのみ心を奪われがちな現代の日本において まことに意義深く大きな賞賛に値します
ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 白井 詔子

第19回 1994年 学校 (School)



監督：山田洋次 Yamada Yoji

脚本：山田洋次、朝間義隆／原案シナリオ：広沢栄／製作：中川滋弘／プロデューサー：深澤宏／撮影：高羽哲夫、長沼六男／美術：出川三男、横山豊／音楽：富田勲

キャスト：西田敏行、竹下景子、萩原聖人、中江有里、新屋英子

製作国：日本／製作年：1993年／上映時間：128分／製作会社：松竹＝日本テレビ放送網＝住友商事作品／配給：松竹

賞状文

あなたが監督なさった映画「学校」は 私たちに大きな感銘を与えてくださいました
物質文明にのみ心を奪われがちな現代の日本において貴方が この作品によって今まで殆ど知られていなかった夜間中学の教師を主人公として その貴い苦勞と彼と生徒との深い信頼と師弟愛を描きつつ真の教育のあり方を社会に強く訴えかけられたことは まことに意義深く大きな賞賛に値します
ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 白井 詔子

第20回 1995年 地球交響曲第二番 (GAIA SYMPHONY II)



監督：龍村仁 Tatsumura Jin

プロデューサー：竹内美樹男／撮影：押切隆世、赤平勉、夏海光造／監修：稲盛和夫

出演者：ジャック・マイヨール、14世ダライ・ラマ法王、フランク・ドレイク、佐藤初女

声の出演：木内みどり、榎本孝明、中村嘉葎雄、三國連太郎

製作国：日本／制作年：1995年／上映時間：2時間10分／製作：京セラ株式会社／製作：株式会社オンザロード

賞状文

あなたが監督されたオンザロード製作の映画「地球交響曲 第二番」は 私たちに大きな感銘を与えてくださいました

ともすれば目先の小さな事に囚われ人として最も大切なことを忘れがちな現代の日本において 宇宙的視野から地球上に住む人間を題材として その宇宙さえも包み込むようなその愛の広さ 強さ 美しさを素晴らしい映像によって強く世に訴えられたことは大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 白井 詔子

第21回 1996年

絵の中のぼくの村 (Eno nakano bokuno mura)



監督：東陽一 Higashi Yoichi

脚本：東陽一、中島丈博／原作：田島征三／製作：山上徹二郎、庄幸司郎／プロデューサー：藤沢克則、萩原吉弘／撮影：清水良雄／水中撮影：佐野哲郎／美術：内藤昭／音楽：カテリーナ古楽合奏団

キャスト：松山慶吾、松山翔吾、原田美枝子、長塚京三

製作国：日本／製作年：1996／上映時間：112分／製作会社：シグロ SIGLO／配給：シグロ SIGLO

賞状文

あなたが監督なさった映画「絵の中のぼくの村」は 映画を愛するわたしたちに深い感銘と喜びを与えてくださいました

高度情報社会を迎えて真の人間性とは何かが問われている今 子供時代に大きな自然を感じ豊かな人間関係を心で味わうことが人として生きるのに いかに大切かをユーモアとファンタジーをもって描いたことは大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会

会長 白井 詔子

第22回 1997年

愛の黙示録 尹鶴子の生涯 (Ai no mokushiroku)



監督：金洙容 Kim Suyon

脚本：中島丈博／原作：尹基（「母よ、そして我が子らへ」）／製作総指揮：近藤晋／企画：岡宗知子／プロデューサー：ヤン・ムンチュオル／撮影：チョン・イルソン／美術：キム・ユジュン、渡辺義雄

キャスト：石田えり、吉用祐、李準、風見章子、沈洪錫

製作国：日本、韓国／製作年：1997／上映時間：102分／製作会社：MT HUMAN SERVICE／配給：映画「愛の黙示録」を世界におくる会

賞状文

あなたが監督なさった映画「愛の黙示録」は 映画を愛するわたしたちに深い感銘と喜びを与えてくださいました

戦前戦後の困難時期に韓国の孤児たちを無償の愛で養い育てた一人の日本人女性の生涯を描いたこの作品は 人間の尊厳と愛の尊さを訴える人間ドラマとして優れていることに加え 映画を通じて日韓親善交流に大きな役割を果たす者であり 大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会

会長 白井 詔子

第23回 1998年 ユキエ (Yukie)



監督：松井久子 Matsui Hisako

脚色：新藤兼人／原作：吉目木晴彦（『寂寥郊野』）／エグゼクティブ・プロデューサー：新藤次郎／プロデューサー：松井久子、吉井久美子／撮影監督：阪本善尚／プロダクション・デザイナー：デニス・グリーンウッド、ペトラ・バーチ／音楽ディレクター：天翔陽子／オリジナル音楽：川崎真弘／音楽プロデューサー：天翔陽子／主題歌：ジミー・デイビス（『ユー・アー・マイ・サンシャイン』）

キャスト：倍賞美津子、ボー・スベンソン、ジョー・クレスト、マーク・コンクリン、シャロン・シュナイダー、ブレイズ・ガルザタ

製作国：日本／製作年：1998／上映時間：93分／製作会社：エッセン・コミュニケーションズ作品（企画：エッセン・コミュニケーションズ／制作：エッセン・ニューヨーク）／配給：シネマ・クロッキオ＝近代映画協会

授賞理由

アルツハイマー症を患う日本人妻ユキエが、家を抜け出して徘徊する。アメリカ人の夫リチャードは一晚中探し続け、ついに見つけ出し抱きしめる。

まるで、長い隠れん坊の末ようやく見つけてもらった子どものような、ユキエの嬉しそうな顔。朝もやの中、愛する夫に身をゆだねて安心しきったその姿は、この世の天国を見いだして安堵する天使のようでもある。

カトリック映画視聴覚協議会が、今年度の日本カトリック映画賞にこの「ユキエ」を選出したのは、この映画が無条件の愛が生む永遠のパートナーシップを美しく描出しているところが、優れて福音的だという点にある。

アルツハイマー症が他の病気と決定的に違うのは、それが本人の記憶を失わせるという点だ。記憶というその人のアイデンティティーの根幹を失ってなお、その人がその人であるとはどういうことか。

そのような状況にあってもなお、老いた二人がパートナーであり続けることは可能なのか。

この映画はそれらの問いに、どのような条件下にあっても二人の物語を守り続け、語り続けることができるし、それこそがパートナーの真の意味だという答えを出している

リチャードは息子にいう。

「妻と私には、二人だけしか知らない四十年にわたるかけがえのない物語がある。片方が記憶を失ったら、もはや私しかその物語を知らないのだ。」

ユキエに対する彼の懸命な介護は、もちろんパートナーへの愛情ゆえだが、それは言い換えるならば、二人の物語への献身なのである。

人は物語がなければ生きていけないし、宗教的に言うならば、人は愛の物語を生み出すために生かされている。たとえ片方が記憶をなくそうとも、二人の出会いと歴史を永遠なる世界へと高めるために、パートナーは互いに身を削りあうよう招かれているのである。

そんな二人を見つめる映画自身のまなざしの何と慈愛に満ちていることか。たとえあなたたちが忘れても、私は決して忘れないと言うかのような、映画の信念と誇りが、すべてのカットを支えている。それはもしかすると、この世を見つめる神のまなざしに近いのかも知れない。

このような映画は、なまはんかな経験と情熱から生まれるものではない。プロデューサーのみならず監督も務めた松井久子監督が、その人生においてどれほど苦しみをくぐり抜け、それゆえにどれほど人生を愛しているか、ルイジアナ州の神々しい大地の映像が、はからずもそんな作り手の豊穣を物語っているように見えた。

晴佐久昌英（『東京教区ニュース』1999年4月26日第162号）

第24回 1999年 ナビィの恋 (Navi no koi)



監督：中江裕司 Nakae Yuji

脚本・原案：中江裕司、中江素子／製作：竹中功、佐々木史朗／製作協力：野田隆司／製作補：澤昌平／プロデューサー：石矢博／協力プロデューサー：佐藤美由紀／撮影監督：高間賢治／美術：真喜屋力／装飾：秋田谷宣博／音楽：磯田健一郎

キャスト：西田尚美、村上淳、平良とみ、登川誠仁

製作国：日本／製作年：1999／上映時間：92分／製作会社：イエス・ビジョンズ＝オフィス・シロウズ作品／配給：オフィス・シロウズ＝東京テアトル

賞状文

あなたが監督なさった映画「ナビィの恋」は 映画を愛するわたしたちに深い感銘とよろこびを与えてくださいました

どんな困難も前向きに乗り越えていく一途なおばあちゃんと どんな出来事も愛情ゆえに引き受けていく愉快なおじいちゃんの物語は 大浦花人間賛歌として人々を元気づける者であり大きな賞賛に値します

ここに OCIC 日本カトリック映画賞トロフィーを贈り表彰いたします

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会

会長 千葉 茂樹

第25回 2000年 最優秀賞 老親 (Rohsin)



監督・企画：楳坪亨鶴子 Makitsubo Tatsuko

原作：門野晴子「老親を棄てられますか」(主婦の友社、講談社)「寝たきり婆あ猛語録」(講談社)／脚色：原田佳夏／製作：楳坪亨鶴子、光永憲之／撮影：藤沢順一／美術：成田ヒロシ／音楽：光永龍太郎、増永真樹

キャスト：萬田久子、草笛光子、米倉斉加年、榎木孝明、岡本綾、小笠原町子、小林桂樹

製作国：日本／製作年：2000／上映時間：112分／配給：パオ＝「老親」製作委員会

賞状文

あなたが監督なさった映画「老親」は 老親介護問題に正面から取り組み 共感と受容の物語をあたたく描いて深い感銘を与えてくれました 介護の現場で日夜苦悩する人々の元氣と希望を呼び覚ましたことは大きな賞賛に値するものであり ここに日本カトリック映画賞 最優秀賞を贈ります

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 千葉 茂樹

第25回 2000年 特別優秀賞 —豪日に架ける—愛の鉄道 (The Railroad of Love)



監督・脚本：千葉茂樹 Chiba Shigeki

製作：石山英勝／企画：小島好美／撮影：伊藤嘉宏／録音：／編集：渡辺行夫／音楽：山崎宏／イメージ曲：荒井敦子／CG作画：藤野知明

製作国：日本／製作年：1999／上映時間：87分

賞状文

あなたが制作なさった映画「愛の鉄道」は 戦後のオーストラリアと日本の和解の架け橋となった神父の活動を見事に再現して深い感動を与えてくれました 許しの尊さを訴え 両国の友好に寄与したことは大きな賞賛に値するものであり ここに日本カトリック映画賞・優秀賞を贈ります

OCIC JAPAN

日本カトリック映画視聴覚メディア協議会
会長 森 一弘

第26回 2001年 GO



監督：行定勲 Yukisada Isao

脚色：宮藤官九郎／原作：金城一紀／企画：遠藤茂行／製作：佐藤雅夫、黒澤満／プロデューサー：天野和人、國松達也、出目宏／撮影：柳島克己／美術：和田洋／装飾：大庭信正／音楽：めいな Co. / 音楽プロデューサー：津島玄一

キャスト：窪塚洋介、柴咲コウ、山崎努、大竹しのぶ、細山田隆人、山本太郎、新井浩文、萩原聖人、大杉漣

製作国：日本／製作年：2001／上映時間：122分／配給：東映

賞状文

あなたがたが製作なさった映画「GO」は 民族・男女・親子など 対立し理解し合えぬ両者を結ぶちからの尊さを生き生きと描いて 私たちに深い感銘を与えてくださいました 真の出会いを求め 自らを超えて走り出す主人公の姿は、憎悪と報復の渦巻くこの時代に希望を与えるものであり 大きな賞賛に値します よってここに日本カトリック映画賞を贈ります

SIGNIS JAPAN (カトリックメディア協議会)
会長 千葉 茂樹

第27回 2002年 チョムスキー 9.11 Power and Terror (Power and Terror Noam Chomsky in Our Times)



監督：ジャン・ユンカーマン John Junkerman
企画・製作：山上徹二郎／撮影：大津幸四郎／音楽：忌野清志郎
キャスト：ノーム・チョムスキー、キャロル・チョムスキー
製作国：日本／製作年：2002年／上映時間：74分／配給：シグロ SIGLO

賞状文

あなたが監督なさったドキュメンタリー映画「チョムスキー 9・11」は テロと報復・戦争の渦巻く時代に真の平和への道筋と示し 知的興奮と熱い共感を与えてくれました
事実の中に真実を読み解く深い洞察によって暴力の欺瞞を告発するチョムスキーを広く紹介したことは 大きな賞賛に値するものであり ここに日本カトリック映画賞を贈ります

SIGNIS JAPAN (カトリックメディア協議会)
会長 千葉 茂樹

第28回 2003年 ヒバクシャ世界の終わりに (HIBAKUSHA AT THE END OF THE WORLD)



監督：鎌仲ひとみ Kamanaka Hitomi

制作：小泉修吉、川井田博之／撮影：岩田まき子、家塚信／音楽：クリストフ・ヒーマン／録音：東京テレビセンター／音声：河崎宏一、村田次郎、中野威洋／編集：鎌仲ひとみ、松田美子、東京テレビセンター

製作国：日本／製作年：2003年／上映時間：117分／配給：グループ現代

授賞理由

教皇ヨハネ・パウロ2世は、現代が、いのちの文化ではなく、死の文化に支配されつつあると述べています(回勅「いのちへの福音」n.24、1995年)。

「死の文化」とは、いのちに反する行動を見過ごしたり助長したりするだけでなく、いのちに逆らう実際上の「罪の構造」を作り出し強固にするものです。死の文化を象徴する「核」は、それがたとえ平和利用の名のもとに行われる研究開発であっても、人類を脅威にさらし続ける現実を、この映画は如実に描いています。

この映画は、人の命の尊さと、「死の文化」に屈せず、いのちを守る人々の姿を伝えようとしている素晴らしい作品です。

第29回 2004年 ライフアーズ 終身刑を超えて (LIFERS)



監督：坂上香 Sakagami Kaori

プロデューサー：坂上香／撮影：南幸男／音楽：ロジャー・スコット・クレイグ／録音：森英司／編集：坂上香／ナレーション：マヤ・ムーア

製作国：日本／製作年：2004年／上映時間：91分／配給：out of frame

授賞理由

映画「ライフアーズ」に出会って最も強く感じたメッセージは「人間は復活することができる」というものです。凶悪犯罪の加害者が、再生の意思と周囲の支援によって改心し、復活する姿を捉えた映像は、私たちに大きな衝撃と希望を与えてくれました。更正プロジェクト「アミティ」の、人間の可能性を深く信じ、互いに受容することで再生する具体的な支援を行う活動は、単に刑務所の内側だけでなく、現代社会全体のあるべき姿を指し示しています。悪と罪の圧倒的な力の中でおも懸念に善と再生を目指す犯罪者たちの姿は、「それでも人間は信じるに値する存在だ」という、われわれの祈りにも似た叫びに答えています。以上のことから、すべての人の良心に訴え、希望を与えるこの作品を、今年度のカトリック映画賞にふさわしいものとして選考しました。

第30回 2005年 村の写真集 (Mura no shashisyu)



監督・脚本：三原光尋 Mihara Mitsuhiro

製作：高原健二、中川滋弘、多井久晃、近藤守、三木和史／プロデューサー：三木和史／撮影：本田茂／音楽：小椋佳／美術：須坂文昭／編集：宮島竜治／録音：鶴巻仁／写真監修：立木義浩／照明：高坂俊秀
キャスト：藤竜也、海東健、宮地真緒

製作国：日本／上映時間：111分／製作年：2003／配給：ビデオプランニング

授賞理由

映画「村の写真集」から最も強く感じたメッセージは「退屈に思える日々の営みの愛しさを感じよう」というものです。

身近な人、家族がどんなに自分にとって大切な存在であるかを気づかせてくれるこの映画は、懐かしい気持ちにさせてくれる風景とゆったりした時間があります。それと同時に新しい時代のスローライフ「LOHAS」(Lifestyles Of Health And Sustainability - 健康や持続可能性を重視するライフスタイル)に通じる新鮮さがあり、時代の呼吸を反映していると感じます。

落ち着いた暮らしの良さを再発見し、周りの人々によって生かされていることを認識させてくれるこの作品を、今年度のカトリック映画賞にふさわしいものとして選考しました。

第31回 2006年 博士の愛した数式 (The Professor and His Beloved Equation)



監督・脚本：小泉堯史 Koizumi Takashi

プロデューサー：荒木美也子、桜井勉／原作：小川洋子／撮影：上田正浩、北澤弘之／音楽：加古隆／美術：酒井賢／編集：阿賀英登／衣装（デザイン）：大脇直子／録音：紅谷恒一／スチール：むらやまあつひと／音響効果：斎藤昌利／照明：山川英明

キャスト：寺尾聰、深津絵里、齋藤隆成、井川比佐志

製作国：日本／製作年：2005／上映時間：117分／配給：アスミック・エース

授賞理由

美しい映画である。「地」が美しいのは「天」が美しいからだ気づかせてくれる、秘跡的映画である。授賞理由は、それにつくる。

大切な人を亡くして、人は自分を失う。大切な記憶をなくして、人は他者を失う。人はなんともしろく、はかない存在だろう。

しかし、もしもこの世界が永遠なる天のことばで創られ、天のことばに語りかけられているのなら。人は何ひとつ失うことがなく、何ひとつ忘れることがない。天才とは、そんな天のことばの文法を発見する者のことだ。彼らは、一つの数式に永遠の愛さえも感じている。たぶん、ひとりの天才の「地」の現実を「天」の眼差しで撮り得たこの映画もまた、天の才によるのだろう。

美しい映画が終わろうとするその時、一人の女子学生が感動に高揚した声で言う。

「先生、ありがとうございました」。

観客はみな、同じ思いでこの映画に感動するのである。

晴佐久昌英

第32回 2007年 ひめゆり (HIMEYURI)



監督：柴田昌平 Shibata Shohei

製作：大兼久由美、小泉修吉／撮影：澤幡正範、一之瀬正史、川崎哲也、川口慎一郎／編集：加賀谷誠、柴田昌平、川口慎一郎／製作会社：プロダクション・エイシア

出演者：元ひめゆり学徒の生存者 22人

製作国：日本／公開：2011年／上映時間 131分／配給：プロダクション・エイシア

授賞理由

戦争を知らない世代が、国民の大半を占める時代が来ている。そして、人々は平和な時代を享受している。

だが、ひめゆり学徒生存者が語りかける証言は、同時代を生きる私たちすべてが肝に銘じておく必要がある。生存した証言者は重い十字架と共に生きている。自分だけが助かってしまったという悔恨と残された者の役割を果たそうとしている姿に、私たちは圧倒される。静かだが、緊迫のある映像の力。

「忘れたいこと」を映画で正視すること自体も辛い。だが信仰を持つ者として敢えてこの映画を若いスタッフの熱意に最高点を投じて称賛と感謝を贈ることにした。

千葉茂樹

第33回 2008年 おくりびと (Departures)



監督：滝田洋二郎 Takita Yojiro

製作：信国一郎／エグゼクティブプロデューサー：間瀬泰宏／プロデューサー：中沢敏明、渡井敏久／企画協力：小口健二／脚本：小山薫堂／撮影：浜田毅／美術：小川富美夫／編集：川島章正／音楽：久石譲／ビューティーディレクター：柘植伊佐夫

キャスト：本木雅弘、広末涼子、山崎努、余貴美子

製作国：日本／映時間：130分／配給：松竹

賞状文

あなたが監督なさった映画「おくりびと」は 人間の生が軽んじられ 死の尊厳も失われかけている現代にあって 一人一人の死を大切に扱う おくりびとを通して 人のかけがえのなさ と 死をも越える愛の素晴らしさを美しく表現してくださいました

これは神の命を与えられている人間の普遍的価値を尊重するキリスト教的精神においても大いに賞賛すべきことであり ここに第三十三回日本カトリック映画賞を贈ります

SIGNIS JAPAN (カトリックメディア協議会)
会長 千葉 茂樹

第34回 2009年 風のかたちー小児がんと仲間たちの10年ー (Shape The Wind)



演出：伊勢真一 Ise Shinichi

撮影：石倉隆二、内藤雅行、田辺司／音楽：横内丙午／録音：米山靖、渡辺丈彦／照明：箕輪栄一／監修：細谷亮太、月本一郎、石本浩市

製作国：日本／製作年：2009年／上映時間：105分／配給：いせフィルム

授賞理由

「イエスは一人の子供の手を取り、御自分のそばに立たせて言われた。『わたしの名のためにこの子供を受け入れるものは、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である』」(ルカ福音書9・47－48)

小児がんと向かい合うことは、神と向かい合うことである。

確かに、子供の病とその苦しみ、何よりもその死は、あまりにも不条理で救いのないものに見える。しかし、この映画を見ていると、そのような最も小さな存在こそが、最も神の恩寵に満たされていることに気付かされる。

子供たちが精一杯生きる姿に触れると、人間を創造した神への信頼が湧いてくる。

子供たちの不安と苦しみを知ること、眠っていた愛の心が呼び覚まされる。

子供たちの死という究極の犠牲こそが、永遠の命への希望を生み出す。

すなわち、病という十字架を背負ったこの子供たちを受け入れる者は、救い主キリストを受け入れ、キリストにおいて御自分の愛を現した神を受け入れているのである。

「最も偉い者」である子供たちを信じてカメラを向け続け、目には見えない信仰と愛と希望を映し出し、時に救い主のまなざしすら感じさせるこの気高い作品に、最大級の賛辞を贈りたい。

晴佐久昌英

第35回 2010年

月あかりの下で～ある定時制高校の記憶～（A School that Was -Learning in the Moonlight）



演出・撮影・編集：太田直子 Oota Naoko

プロデューサー：田野稔／撮影：家塚信、大野夏郎／録音：高木創（東京テレビセンター）／音楽効果：合田享生／ナレーション：太田直／映像協力：日本テレビ報道局「テージセー～1461日の記憶～」／製作著作：グループ現代

製作国：日本／上映時間：115分

授賞理由

自分も居場所になりたくなる映画

人は、人に受け入れられて、人になる。その原点から離れたところに社会は成り立たないし、その原点を忘れたならば教育も意味を成さない。映画「月あかりの下で～ある定時制高校の記憶～」は、その原点を丸ごと映し出して、観る者をその原点に引き戻すことに成功した稀有な作品である。

若者たちの真の居場所を撮ることなど、不可能に近い。居場所とは物理的な場所のことではなく、誰かに受容される現場のことだからだ。最も美しいものこそ、最も人目につきにくい。しかしカメラは、居場所をなくした若者たちに寄り添い、信頼関係を築き、共に年月を重ねることで次々とその奇跡の現場をカメラに収めていく。それは単なる取材を越えて、カメラもまた居場所の一部になる事でしかなしえないことである。それを象徴する美しいシーンがある。

仲間との太鼓の練習中、少女が何気ない風に体育館を出て行く。普通ならトイレだろうくらいに考えるところだが、カメラはそこに何かの気配を感じ取って後を追う。事実そのとき少女はつらい気持ちを抱えていて、その場にいらなかったのだ。少女は階段の途中で、氣遣って追って来たカメラに気づくと、押し殺していた思いが溢れ出し、しゃがんで鳴咽する。その瞬間、カメラマンは思わず手を伸ばして少女の肩を抱き「だいじょうぶ？」と声をかけるのだ。近すぎて少女を写せないカメラは、少女の肩越しの壁を撮り続ける。そこへ少女を氣遣った友人が上って来る。するとカメラは、今度は二人をそっとしておくために後ずさりしていくのである。踊り場を曲がって二人が見えなくなっても、手ブレカメラはゆっくりと後ずさりして階段を下りていく。あたかもこう言うかのように。「だいじょうぶ、あなたはこの試練をきっと乗り越えられる。私はずっと見つめてきたからわかる。あなたは必ず幸せになれるって信じてる。だから、がんばって。そのときまで、あなたに寄り添っているから。」

このような映像を、今まで見たことがない。本来ドキュメンタリーでは、取材側が対象に影響を与えることを極力避ける。相手に関与するのはせいぜいインタビューどまりで、対象を直接助けたり誘導したりしてはドキュメンタリーでなくなるからだ。そこでカメラは普通、第三者的でスティックなカメラワークに徹することになる。

ところがこのシーンでは、そのカメラが思わず手を伸ばしてしまっているのだ。まさに禁じ手だがその手に違和感はなく、むしろそこにカメラと対象との間の一朝一夕では成り立たない信頼関係が浮かび上がる。しかも別の友人が登場すると、カメラは少女をゆだねて後ずさりしていく。カメラはもはや、浦商（県立浦和商业高校定時制）の一部なのである。これがこの映画のすべてだと言っていいだろう。つまり浦商においては生徒同様カメラも受容されており、同時にカメラもまた浦商とその生徒を信頼しているのであって、そんな奇跡的共生を当たり前のように実現させていること自体が、浦商が誰にとっても真の居場所であることを何よりも雄弁に物語っているのである。

曲がり角に来ている現代社会が今最も必要としているのが、こちらの価値観を押し付けずだれをも排除しない寛容と受容の現場であることは、すでにはっきりしている。今や私たちが目指すべきは、浦商を復活させることではなく、社会全体を浦商にすることなのだ。居場所を作るのではなく、自分が居場所になること。観るものに真の居場所を体験させ、自分も居場所になりたいという思いに駆り立てさせる映画として、高く評価したい。

晴佐久昌英

第36回 2011年 エンディングノート (Death of A Japanese Salesman)



監督：砂田麻美 Sunada Mami

製作：是枝裕和／プロデューサー：是枝裕和／撮影・編集：砂田麻美

キャスト：砂田知昭

製作国：日本／製作年：2011／上映時間：89分／配給：ビターズ・エンド

授賞理由

何か尊いことが始まっている

人は、愛するものを撮る。

生まれてきたわが子や、かわいいペット。美しい風景や、大好きな恋人。人は、愛するものをただ愛しているだけではすまず、思わずカメラを向けてしまう。それは、なぜか。実は、そのとき人は愛するものに「意味」を与えているのである。

砂田監督が死に行く父を撮り続けたのは、愛する父の死に「意味」を与えなかったからではないか。それを監督自身がどれだけ自覚していたかはともかく、この映画全体から「父のエピソードはすべてかけがえない」、「父の苦しみは無駄な苦しみではない」、「父の死は無意味な死ではない」という思いが溢れているので、観る者はいつしかこの父親を愛しく思うばかりか、その生と死をととても意義深い、尊いものとして受け止めていく。映画が教会での葬儀を願うシーンに始まり、洗礼を経て葬儀ミサのシーンで終わるのも、それらのシーンが、この父親の最期がとても聖なる出来事であるという美しい確信の象徴として扱われているからに違いない。

キリスト教は「神の愛を信じる者は永遠に生きる」のであり、「死は終わりではなく永遠の命の始まりである」と教える。娘が撮っているのは、実は父親のエンディングノートではなく、オープニングノートなのだ。この映画が見る者を幸福にするのは、愛は死を超え、人は永遠に生きるという希望を直観するからである。

今後、愛するものの死に立ち会うとき、だれもがこの映画を思い出すだろう。「これは終わりではない、いままさに何か尊いことが始まっているのだ」という希望と共に。

晴佐久昌英

第37回 2012年 隣人 (Never Let Me Go)



監督：刀川和也 Tachikawa Kazuya

企画：稲塚由美子／撮影：刀川和也、小野さやか、大澤一生／編集：辻井潔／構成：大澤一生／プロデューサー：野中章弘、大澤一生／製作・配給：アジアプレス・インターナショナル 製作国：日本／製作年：2011／上映時間：85分

授賞理由

真正の家族の映画

「家族」って、なんだろう。血のつながりじゃない。夫婦とか養子とかは、血はつながっていないけれど家族だ。法律で決めることでもない。親友とか同居人とか、家族以上に家族だってことがある。

カトリックの結婚式で、二人の誓いに続いて司祭が宣言する言葉がある。

「神が結んだものを、人が分けることはできません」

聖書にあるイエスの言葉だが、これこそが、家族の定義なのではないだろうか。

家族とは、大いなる力に結ばれていると信じて、とにかく一緒にいるチームのことだ。その人がどんな性格か、その人を好きか嫌い、その人に何が出来るか出来ないか、そういう個々の条件と一切関係なく、天のご縁を信じて共にあり続けるチームがあるならば、それは間違いなく家族だ。

この映画は、家族の映画だ。撮っている対象は一児童養護施設だが、血縁ではないのに、血縁に恵まれなかった子供たちとただひたすらに一緒にいるという稀有なチームを撮っているという意味で、真正の家族の映画だ。互いにぶつかりあうこともあるし、失敗することもあるし、時には疲れ果てることもあるけれど、とにかく一緒にいて、共に成長していくチームをカメラは愛情を持ってどこまでも追いつける。

こうなるとこれはもはや、ホームムービーであろう。撮っている人もまた、いつしか家族の一員になっていることが、画面の端々から隠しようもなくにじみ出ている。はじめのうちは音楽もナレーションもないことに戸惑ったが、ホームムービーだと考えれば納得がいく。撮る者にしてみれば、そこにただ愛する子どもが映っていればいいのだから。撮ることは、愛することだ。カメラもまた「隣人」となって、つらい現実を背負う子どもたちと一緒に続けたことに、賞を差し上げたいと思う。

晴佐久昌英

第38回 2013年 先祖になる (Roots)



監督：池谷 薫 Ikeya Kaoru

撮影：福居正治、坂口勇太、金子英樹／録音：青田直也、遠藤 悟／編集：田山晃一／題字：佐藤直志
／プロデューサー：権 洋子

製作国：日本／製作年：2012／上映時間：118分／配給：蓮ユニバース

授賞理由

カッコいい男、カッコいい映画

カッコいい。ともかく、カッコいい。本当のカッコよさとはこういうことを言うんだよというお手本のような男を、惚れ込んだカメラがきっちり撮った。

佐藤直志さん、77歳。陸前高田市在住。東日本大震災の津波で息子を失いながら、半壊した自宅に住み続け、田植えを断行し、祭りを応援し、1年後には自力で我が家を再建した男。内面からにじみ出てくるそのカッコよさは、どこからくるのか。

まず、自分の信念を持っていること。常識にとらわれず、周囲に振り回されず、自らの内なる声を信じてまっすぐに行動する姿が、すがすがしい。

またものごとを長い目で見る余裕がすごい。時流に流されず、ひと時の損得に惑わされず、先祖から受け継いできた真に価値あるものを生かそうとする姿勢に、感心する。

そしてなんとと言っても、困難の中で希望を持ち続ける、その精神の輝き。いかなる逆境でも前を向き、今出来る最善を尽くそうとするその生き方は、まさにカッコいい。あたかも、命そのもののカッコよさが、一人の人間の魂に宿っているかのような。

今の世の中は、とてもカッコわるい。自分のこと、目先のことだけ考えているから。そんな澁んだ眼に、子々孫々のために尽くす彼の姿は、あまりにもまぶしい。

映像人であるならば、だれだってそんなまぶしい画面を撮りたいわけで、直志さんを見出した監督の喜びと、その生きざまを撮る感動が、画面から香り立つ。こういう素材に「本物」を見出して撮る人たちもまた、実にカッコいい。

日本カトリック映画賞は、常に「本物」を追い求めてきた。『先祖になる』は、間違いなく「本物」の映画だ。このような映画に「本物」を見出す映画賞もまた、カッコいいと思うのだが、映画ラストに建ったあの家を見れば、納得していただけたと思う。

直志さんが建てたのは、ただの家ではない。それは、人間の尊厳と、生きる希望のシンボルなのだ。あんなカッコいい家を、今まで見たことがない。

晴佐久昌英

第39回 2014年 谷川さん、詩をひとつ作ってください。(Mr. Tanikawa, please write a poem.)



監督：杉本信昭 Sugimoto Nobuaki

構成：村本勝／プロデューサー：小松原時夫、住田望／撮影：落合智成／音楽：谷川賢作

製作国：日本／上映時間：82分／配給：モンタージュ

授賞理由

このような映画を見たことがない

谷川俊太郎の心に詩が誕生するところを、映画に撮る。

なんと無謀で、なんと胸ときめく企画だろう。これ以上に創造的なチャレンジがあるだろうか。

谷川俊太郎という詩人ほど、創造の秘密に深く関わってきた詩人はいない。実は、彼は詩を書くというよりは詩に書かされているのであり、彼こそは、ことばが世界を生み出すという創造の現場に仕える、ことばの祭司だからだ。

ヨハネ福音書は、その冒頭部分で、天地創造の秘密を語っている。

「初めにことばがあった」「万物はことばによって成った」「ことばの内にいのちがあった」

ことばは世界を生み、ことばは人間を愛し、ことばは魂を生かす。

そんな透明な「天のことば」と、汚れと情熱を孕む「地のことば」のあわいを生き、天地を結ぶよう召された者が、真の詩人なのではないか。それは本来ならば宗教の使命のはずなのだが、彼らの多くはいまや天のことばに勝手な色を塗り、地のことばを暴力で支配している。

今、だれもが求めているのは、欲望も悲しみも愚かさもすべて含めて人間を普遍的に祝福することば、すなわち詩なのである。

映画の半ば、雑踏の中で詩を朗読する詩人は、廃墟の祭壇でミサを捧げる司祭のようだ。

見よ、聖なることばは、わが子を生み出そうとしている――。

映画の終わりには、各地で精一杯生きている一人ひとりに向けて、真の詩人から詩が溢れ出すという、奇跡の画面が現れる。そこに、自らが生んだ人間に、ことば自身が語りかけているのが確かに映っているのを見て、魂が涙ぐむような救いを感じた。天のことばに仕えるカトリック教会として、なんととても感謝すべき映画だと感じた瞬間だ。

今まで、このような映画を見たことがない。

晴佐久昌英

第40回 2015年 あん (An)



監督：河瀬 直美 Kawase Naomi

原作：ドリアン助川／撮影：穂山茂樹／録音：森英司／編集：Tina Baz／プロデューサー：福嶋更一郎、澤田正道、大山義人

キャスト：樹木希林、永瀬正敏、内田伽羅、市原悦子、浅田美代子ほか

製作：映画「あん」製作委員会、COMME DES CINEMAS、TWENTY TWENTY VISION/MAM/ZDF-ARTE／配給：エレファントハウス／製作年：2015年／製作国：日本・フランス・ドイツ／上映時間：113分

授賞理由

目に見えないものを、撮ることができたら。

この世界の奥深くに息づいている、あの透明で清らかな何ものかを、カメラで捉えることができたなら。

それは、およそ映画監督ならばだれもが心に秘めている、見果てぬ夢だ。

河瀬直美監督は、『あん』において、その夢を現実のものとした。

たとえば、木漏れ日。

万感の思いで梢を見上げる主人公の主観ショットとして、カメラは、きらめく木々の葉とその隙間からこぼれ落ちる光を撮る。主人公が、宇宙の根源からあふれくる聖なる光を受けて、いのちという神秘を輝かせている、その恩寵の瞬間が、確かにそこには映っている。

そのとき観客が見ているのは、映像ではない。その映像を見ている自らの輝きなのだ。

炊き立ての小豆から立ち上る湯気の向こうに、この私を生んだ宇宙の愛が見える。

つらい人生を受け入れて生きてきた一人の人間の瞳の奥に、この私という存在そのものを祝福する永遠の愛が見える。

日本カトリック映画賞もまた、このような映画を長年にわたって夢見てきた。キリスト教は、目には見えない神の愛を、目に見えるかたちで現実のものとする宗教だからだ。

夢をかなえてくれた河瀬直美監督に、小さな賞で最大限の敬意を表したい。

「私たちは、この世を見るために生まれて来た」「何かになれなくても、私たちには生きる意味がある」と主人公が言うとき、観客は悟る。私はこの映画を見るために生まれて来たのだ、と。こんな映画を見ることができたのだから、たとえ何かになれなくても、生きていていいのだ、と。

一見冷たくて試練に満ちたこの世界は、実はその真ん中に、この上なく優しくて尊い秘密を隠している。

どらやきの、「あん」のように。

晴佐久昌英

シグニス平和賞

シグニスの「平和の文化を推進する」という理念に則って、今回特別に創設されました。カトリックの世界観や価値観に合致し、特に強く平和を訴えかける優秀な作品を厳選して、作品および監督を顕彰するものです。

第1回 2014年

石川文洋を旅する (a Voyage of Bun-you:VIETNAM and OKINAWA)



監督：大宮浩一 Omiya Koichi

企画：大宮浩一／撮影：山内大堂、加藤孝信／挿入歌：古謝美佐子／音響デザイン：石垣哲／編集：遠山慎二

キャスト：石川文洋

製作国：日本／製作年：2014／上映時間：109分／配給：東風

授賞理由

会うべき人に会うために

なぜ、戦争はなくなるのだろうか。

人類最大の疑問だ。これほどに悲惨で無意味な暴力を、これほどに知恵があり愛のある人類が、何故防げないのだろうか。

古今の哲人たちも様々な道を説いてきたが、現実の世界には復讐の連鎖が続き、平和憲法の国さえも被害妄想に陥って次の過ちの準備を始めている。人々の中には徒労感と無力感が沈殿し、まっとうな思考は停止寸前だ。

そんな時代に、この映画が現れた。希望の映画だと思う、真の平和をもたらす唯一の、そしてあまりにも単純な道が描かれているからだ。

「会いに行くこと」。

石川文洋は、人間に会いに行く。世界一周で各国の人に会い、ベトナムの民衆に会い、沖縄の人々に会う。会えば、そこに共感が生まれる。共感から平和への歩みが始まる。それこそが、石川文洋の旅してきた道だ。

戦争を始める人たちは、会っていない。夢見るドオイケー等兵に、手を合わせる老人に、怯える少女の瞳に、会っていない。

石川文洋の自然体、弱さと正直さ、旅と酒を愛する等身大の人物像に、励まされる。特別なことじゃない、自分も会いに行けばいいんだと気づかせてくれる。会うべき人に会うために、一歩踏み出す勇気を与えてくれる映画だ。

このような映画をどうしても応援したくて、新たな賞を設けることにした。

「シグニス平和賞」

第一回をこの映画に贈れることを誇りに思う。

晴佐久昌英



2015年5月授賞式後、受賞監督とスタッフ（中央晴佐久神父の右隣が大宮浩一監督、右隣が杉本信昭監督）

受賞式風景



1986 年（第 11 回）「海と毒薬」熊井啓監督



1983 年（第 8 回）
「この子を残して」木下恵介監督
（右 Sr. 白井詔子）



1989 年（第 14 回）「黒い雨」今村昌平監督（手前右）



1992 年（第 17 回）「阿賀に生きる」佐藤真監督



1993 年（第 18 回）
「スペインからの手紙 ベンボスタの子どもたち」
朝間義隆監督



1996 年（第 21 回）「絵の中のぼくの村」
東陽一監督



2002 年（第 27 回）
「チョムスキー 9.11 Power and Terror」
ジャン・ユンカーマン監督



2004 年（第 29 回）
「ライフアーズ 終身刑を超えて」坂上香監督



2005 年（第 30 回）「村の写真集」三原光尋監督



2012 年（第 37 回）「隣る人」刀川和也監督



2014 年（第 39 回）
「谷川さん、詩をひとつ作ってください。」
杉本信昭監督

発 行：SIGNIS JAPAN

(カトリックメディア協議会)

代 表：千葉茂樹

発行所：〒 107-0052

東京都港区赤坂 8 - 12 - 42

聖パウロ女子修道会内

TEL 03 - 3479 - 3941

E-mail：info@signis-japan.org

<http://signis-japan.org/>
